

物語イスラエルの歴史： アブラハムから中東戦争まで

高橋正男著 中央公論新社 2008 (中公新書)

商学部教授 梶原勝美



大学人は、研究者も学生も、およそ大学に属する者は、本を読む、読書人だと思っている。さて、私についていえば、本を読み、未知なることを知ったり、知識を得たりかつまた知的ロマンの世界で遊ぶことが好きである。最近でははるかな過去の歴史ロマンであるシルクロードに浸っている。読書のスルメも今回で4回目になるが、一回目は、『遊牧民から見た世界史:民族も国境も超えて』、二回目が『シルクロードの経済人類学;日本とキルギスを繋ぐ文化の謎』、三回目が『中国を追われたウイグル人』、『中国はチベットからパンダを盗んだ』、『中国ニセモノ社会事情』とシルクロードに関係した本を紹介してきたが、本年はシルクロードの中央にあたるキルギスから西南へ移動して、シルクロードを少し離れたイスラエルについての本を紹介したい。

中央アジアからイスラエルの間にはいくつかの国々が横たわっており(注1)、いずれもがイスラムといわれる国々である。その先の国、イスラエルはイスラムではなく、ユダヤの世界である。イスラム諸国よりは少しは知っているつもりであるが、多くの日本人にはなじみのない国であるイスラエルの4000年の永きにわたる歴史を著したのが、『物語イスラエルの歴史』である。

同書は私にとって難解である。というのは、同書はイスラエルまたはパレスチナともいわれている地の4000年の歴史と多くの民族の興亡と戦争の物語であり、しかもそこから世界中に散らばっていったユダヤ人の物語である。それとともに、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地があり、3つの宗教の信者が混在しており、その理解には、経典である旧約聖書、新約聖書、コーランの知識も必要である。したがって、同書が難解であるのは無理からぬことであるが、読み進んでいくにつれ、イスラエルは古来より乳と蜜の流れる地といわれてきており、また、カナヅチでも沈まない死海があることを知り、まだ見ぬイスラエルに機会があれば旅行してみたいくなる。

これまで断片的に知っていたノアの箱舟、モーゼの十戒、ソロモン王、シバの女王、バビロン捕囚、アレキサンダー大王、イエス・キリスト、マホメット、十字軍、ローマ教皇、サラディン、スレイマン1世、シオニズム、ロスチャイルド、アラビアのロレンス、イスラエルの建国、中東戦争など多くの聞きかじりの知識が一つの歴史として繋がったような気がする。

さらに、うれしいことが二つあった。その一つは、十字軍である。これまで私はイスラムに占領され、迫害されていたキリスト教の聖地エルサレムをローマ教皇が中心となり十字軍を組織し、奪回したものと思っていた。正義が西洋のキリスト教世界にあり、悪はイスラムだと理解していたが、同書から、そうではなく当時のエルサレムの人々は野蛮なキリスト教徒の武装集団が侵略してきたという認識であったことを知り、今までの知識が片手落ちのものであり、真の理解は両者を知らなければならぬことを改めて知った次第である。そういえば、アメリカのイラク侵攻は、ブッシュ前大統領はフセインの圧制からイラク国民を解放し、自由を与えたといいい、その一方、イラク人は、アメリカ軍は単なる侵略軍であるとの認識で、その両者のギャップがイラクの混乱の背景にあるのとなんとなく似ているのではないかと思わざるを得ない。

もう一つは、かねがね不思議に思っていたのがイスラエルの公用語になっているヘブライ語である。ユダヤ人がイスラエルを出てから2000年になり、しかも世界中に散らばったユダヤ人が何でヘブライ語を使えるのか不思議で、ユダヤ人は民族意識が強く、仲間同士がゲッターのようなところでコミュニティを作り生活したので、ヘブライ語が生き残っていたものとてつきり思っていた。ところが、同書から、世界の各地に散らばったユダヤ人は現地化し、現地語を使うようになり、日常言語としてのヘブライ語は滅び、ただ旧約聖書の中のヘブライ語だけが信仰と共に生き残っていただけで、その復活にはベン・イェフダーの超人的な努力があったことを知り、彼の伝記(注2)を求め、一気に読んでしまった。

自分の常識を打ち破り、自分のこれまでの知識、理解が間違いであると思われることが書いてある本に出会うということは、新たな理解が生まれ、知的ロマンと知的好奇心が満たされ、少し利口になったような気がして、何よりもうれしいことである。それをくれた本が、上記の『物語イスラエルの歴史』である。私の読書という最大の楽しみがこれからも続きそうである。

したがって、知識人であるべき学生諸君も私と同じように読書人への道を歩み、楽しみを共有したいものである。そこで、手始めに上記の本の一読が契機となり、さらに、多くの本を読み、イスラエル問題の歴史的真相の理解に近づくとともに新たに世界を見つめ直すことを通じて、学生諸君が読書の本当の意味を味わうことができる読書人になることを期待したい。

注1. 物語イランの歴史: 誇り高きベルシアの系譜 宮田律著 中央公論新社 2002 (中公新書) イラク建国: 「不可能な国家」の原点 阿部重夫著 中央公論新社 2004 (中公新書) 物語中東の歴史: オリエント五〇〇年の光芒 幸田口義郎著 中央公論新社 2001 (中公新書)

注2. 不屈のユダヤ魂: ヘブライ語の父ベン・イェフダーの生涯 ロバート・セントジョン著 島野信宏訳 ミルトス 1988